十歳に至らん比（ころ）ほひに、小三災（飢饉・疾病・戦争）と云こと、あるべし。

人種（じんしゆ）ほとほと尽（き）て、たゞ一万人をあます。その人（残った一万人が）善を行（おこなひ）て、又、寿命も増し、果報（報いとして受ける結果）もすゝみて、二万歳にいたらん時、鉄輪王、出（い）でて南（なん）一州を領すべし。

四万歳の時、銅輪王、出でて東・南二州を領す。

六万歳の時、銀輪王、出でて東・西・南三州を領す。

八万四千歳の時、金輪王、出でて四天下（全州）を統領す。

其の報（むくい）、上（かみ）に云（いへ）るが如し。

かの時、又、減にむかひて、弥勒仏（みろくぶつ）出（で）給べし〈八万才の時とも云〉。

此後、十八回の減増（寿命の増減）あるべし。

かくて、大火災と云こと、おこりて、色界（しきかい：凡夫が輪廻転生をくりかえす世界を三界といい、色界はその一つ。ほかに欲界、無色界がある）の初禅（色界を四つに分けた第一段階に）、梵天（ぼんてん）まで焼けぬ。

三千大千世界、同時に滅尽す。これを壊劫（ゑごふ）と云ふ。

かくて世界、虚空黒穴（こくうこくけつ）のごとくなるを、空劫と云ふ。

かくの如（く）すること、七度の火災をへて大水災あり。

このたびは第二禅（初禅の次、色界の第二段階）まで壊（ゑ）す（壊滅する）。

七々の火・七々の水災をへて、大風災ありて、第三禅（第二禅の次、色界の第三段階）まで壊（ゑ）す。是を大三災と云也。

第四禅（色界の第四段階）已上は、内外（ないげ）の過患（くわげん：悟りをさまたげる煩悩）あることなし。

此四禅の中（なか）に五天あり。四（よつ：夢想天・広果天・福生天・無雲天）は凡夫（ぼんふ）の住所、一（ひとつ）は浄居天（じやうごてん）とて証果（しようくわ）の聖者（しやうじや：仏が悟った果ての境地に達したもの）の住処（ぢゆうしよ）也。

此浄居天をすぎて摩醯首羅（まけいしゆら：摩醯首羅はサンスクリット語の音写で、漢訳が大自在天。ヒンドゥー教の最高神シバ神 Śiva が仏教にとり入れられて護法神となったもの）天王の宮殿あり〈大自在天（だいじざいてん）とも云〉。

（摩醯首羅天王は）色界（しきかい）の最頂（さいちやう）に居（きよ）して、大千世界を統領す。

其天のひろさ、彼の世界（大千世界）にわたれり〈下天（げてん）も広狭（広義狭義に）に不同（ふどう）あり。初禅の梵天は一四（いちし）天下（東西南北の四天下）のひろさなり〉。

此上に無色界の天あり。又四地をわかてり（識無辺処、空無辺処、無所有処、非想非非処の四処にわかれている）といへり。

此らの天は、小大の災（さい：小災や大災）にあはずと云（へ）ども、業力（ごふりき）に際限ありて報（はう：果報）尽（き）なば、退没（たいもつ：下界に没するであろう）すべし、と見えたり。

震旦は、ことに書契（しよけい：書くことの約束、つまり文字）を、こと（大事）とする国なれども、世界建立（こんりふ）を云（いへ）る事、たしかならず。

儒書には伏犠（ふくぎ：古代中国の伝説上の聖王。三皇の一人で蛇身人面で「八卦」をつくり漁獲法と狩猟法を民衆に教えたとされる聖王）氏と云（い）ふ王よりあなたをば云（いは）ず。

但（ただし）異書（仏典が内典でそれ以外の書。外典ともいう。ゲテ物という時の外典。多くの場合は儒書をさすが、ここでは道家<け>の書）の説に、混沌未分（こんとんみぶん）のかたち、天・地・人の初（はじめ）を云るは、神代（かみよ：わが国の神代）の起（おこり）に相似たり。

或は、又、盤古（ばんこ）と云王あり。「目は日月（じつげつ）となり、毛髪は草木（さうもく）となる」と云る事もあり。

それ（盤古王）より、しもつかた、天皇（てんくわう）・地皇・人皇・五龍（ごりよう）等の諸（もろもろの）氏、うちつづきて（次々と）多くの王あり。其間、数万歳をへたりと云ふ。

我朝の初めは、天神の種をうけて世界を建立するすがたは、天竺の説に似たる方もあるにや。

されど、これ（我朝の初め）は天祖（あまつみおや）より以来（このかた）継体たがはず（継承に乱れたところがなく）して、たゞ一種ましますこと、天竺（インド）にも其類（たぐひ：類例）なし。

彼（の）国（天竺）の初の民主王も、衆（民衆）のためにえらびたてられ（擁立され）しより相続せり。

又、世くだりては、その種姓（しゆせい：その血筋を受けた王）も、おほくほろぼされて、勢力あれば（力さえあれば）、下劣の種（卑しい血筋の者）も国主となり、あまさへ、五天竺を統領するやから（輩）も、有き。